

社会実験の概要

期間:平成26年10月7日(火)～平成27年3月31日(火)

内容:

1. 舗装劣化状態の把握と可視化

①簡易路面性状調査による舗装劣化状態の把握

2. 既存情報のデータベース化と可視化

②住民からの苦情を含む要望内容と補修工事履歴、占用工事計画のデータベース化

③可視化の実施と補修計画への活用

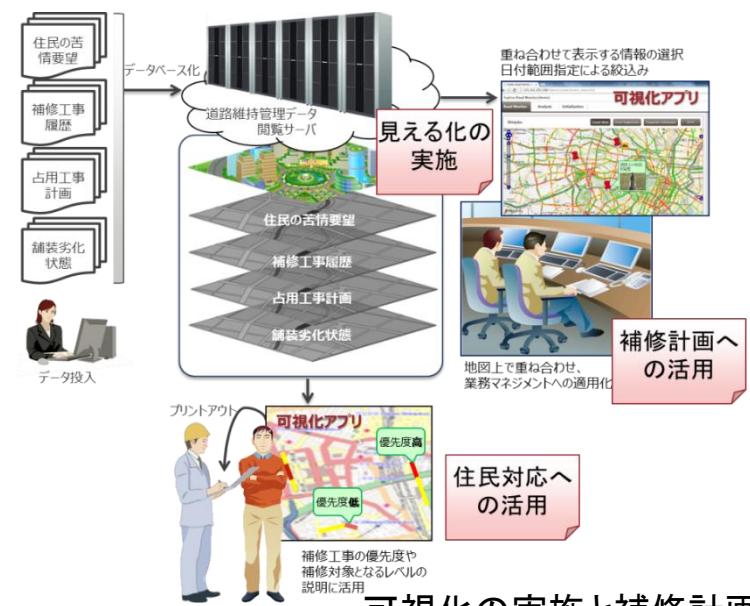
3. 住民対応への活用とデータベース化の効果検証

④劣化状態の定量的評価による住民対応への活用

⑤①～④の実施結果を踏まえた補修計画立案等の将来の展開に向けた課題抽出



現地路面確認の画面



可視化の実施と補修計画への活用イメージ

実験結果

1. 簡易路面性状調査

期待された効果	計測結果	計測結果に対する評価
スマートフォンを活用した簡易路面性状調査は、路面性状調査(MCI測定)の簡易版として十分実用に耐える測定方法であることを確認することを確認する。一致率は80%以上を期待。	平成25年6月にMCI測定を行った路線について、平成26年12月に簡易路面性状調査で評価した。一致率は77.5%であった。	18の評価区間のうち4区間をMCI測定より劣化が大きいと検出したが、現地調査の結果、1年半の間に劣化が進んでいることが確認された。これよりMCI調査と同等の機能を有していると評価した。

2. 住民対応への活用

期待された効果	計測結果	計測結果に対する評価
道路補修を要望する住民に対して、簡易劣化診断結果をもとに補修の実施可否、補修工事の内容を説明し理解を得る。容認率を70%と設定。	実際に補修を要望してきた住民2名、市民および市道利用者23名に対して、説明を行った。90%の人が「資料は分かりやすい」「こういった取組は公平性が期待出来る」と回答している。	補修の優先順位を論理的に決定し、効率よく補修して行くことは、90%の人に評価された。

本格実施に向けた課題

- ・簡易路面性状調査の活用に関して重ね合わせを自動化し、市道全体の見える化を進め、また、補修実態に合わせた診断単位を見直す。
- ・工事情報データベースの補修計画への活用に関して、占用工事の事業者の協力を得ながら市道の劣化状況を共有化していくことが必要。
- ・住民説明への活用に関して、住民の納得を得るために、仕組みを住民にも分かりやすく説明することが必要。
- ・補修優先順位は、まずは、事故要因、瑕疵責任となるような著しい劣化を最優先とし、それ以外は、市道全体の見える化を並行して進め、補修優先度を決めて行くことが必要。